

2019 年度

高校生国際協力実体験プログラム

報 告 書



2019 年（令和元年）

7月25日～7月26日



独立行政法人 国際協力機構
九州センター（JICA九州）

<目 次>

1. 概 要 報 告	1
2. プログラム報告	
開 会 式	3
自己紹介・アイスブレイク	4
国際理解ワークショップ	6
青年海外協力隊活動計画作り	8
国際交流パーティー	11
青年海外協力隊活動計画発表	14
振り返り・閉会式	17
参加校一覧・スタッフ一覧	19
3. 添 付 資 料	
・高校生国際協力実体験プログラム募集要項	21
・アンケート集計結果（参加生徒・教員）	30

1. 概要報告

1996年よりJICA九州は、九州地区在住の高校生を対象に、開発途上国への理解を深めることを目的とした「高校生国際協力実体験プログラム」を実施しており、今回で24回目を迎えた。本年度も昨年度に引き続き、1泊2日での1回のみ開催となった。

本年度は九州6県から24校の応募があり、応募書類によって選考を行い、7校を合格とした。生徒26名、教員7名、合計33名の参加となった。

参加生徒26名の内訳は、1年生が8名、2年生が12名、3年生が6名で、男子が8名、女子が18名であった。

事前学習として、各県国際協力推進員が参加校を訪れ、JICA事業の紹介を行った。また、参加する生徒達には、プログラム参加前の「国際協力」に関するイメージをウェビング^{*1}により記述してもらい、プログラム後との比較を行った。

プログラムは7月25日と26日にJICA九州にて行なわれた。アイスブレイキングで緊張をほぐした後、国際理解ワークショップ、青年海外協力隊活動計画作り（元青年海外協力隊員による体験談を含む）および計画発表、JICA研修員受入事業により各国からJICA九州に訪している研修員との交流等を行なった。

生徒・教員に対するアンケートの結果からは、プログラムに対する満足度が高いことが伺えた。生徒達の意見としては、「外国や英語に対して、国際協力に対する価値観が変わった」、「これから自分にできることは何かを考えて、実際に行動しようと感じました」などがあった。

プログラム全体を通しての参加者の評価は以下の通りである。

【アンケート結果】

・2日間を通してプログラムの内容の満足度は何%でしたか（生徒26名・教員7名）

満足度 (%)	100 以上	90 ~ 99	80 ~ 89	80 未満
人数	15 人	14 人	0 人	4 人

3分の2以上の参加者が90%以上の満足度を示しており、今回のプログラム内容が充実したものであり、参加者の期待に応えられていたことが伺える。

満足度が80%未満の理由としては、「もっと自分の英語力やコミュニケーション力をつけておけばディナーも充実したものになったかなと少し後悔しています」や、「もう少し英語をしゃべれたらよかったとか、計画づくりの時にもう少し考えておけばという思いがありました」などの意見があった。

また、生徒・教員とも、JICA研修員と交流する時間をもっとほしいという意見があるため、翌年度の交流プログラムの内容及び時間については再度検討したい。

各生徒に様々な観点からの質問を考慮してもらうこと自体が重要であるため、主体的に質問をしてもらうような工夫・仕組みを今後検討していきたい（例えば、1人〇回の質問目標を設定するなど）。

今後も今回の反省を踏まえながらより良いプログラムを実施していきたい。

※1 「ウェビング」

一つの題材・単語（本プログラムの場合は「国際協力」）を中心として、その題材から連想できるものを書き出していき、周りに網の目のように線につなげていく方法。グループ内での各個人の意見を共有し、課題抽出や課題解決などの計画策定に用いられる手法。



(ウェビングの様子)

2. プログラム報告

【プログラム名】

開 会 式

担当：森川 大毅（福岡県国際協力推進員）

和田 仁智（佐賀県国際協力推進員）

(1) ね ら い

- ・ プログラムの開会をもって参加への意識を高める。
- ・ プログラムの目的および意義を確認することでより効果的なプログラムを目指す。
- ・ プログラム運営スタッフを紹介し、青年海外協力隊経験者の存在を認識する。

(2) 概 要

「高校生国際協力実体験プログラム 2019」を開催するにあたり、JICA 九州センター次長の高城元生が開会の挨拶を行った。

JICA が実施している国際協力事業についての説明を行った後、本プログラムの意義、本プログラム中だけでなく、事後も本プログラムで得た気づきや学びを深めてほしいという参加者への期待を述べた。開会挨拶後、2日間を共に過ごすスタッフ（九州各県の国際協力推進員、（特活）九州海外協力協会職員）が自己紹介と本プログラムの流れ、2日間を九州センターで過ごすにあたっての諸注意を行った。



(開会挨拶の様子)



(スタッフ自己紹介)

【プログラム名】

自己紹介・アイスブレイク

担当：赤星 亜朱香（熊本県国際協力推進員）

(1) ねらい

- ・ 参加者同士の交流を深め、緊張を解く。
- ・ お互いを知る。
- ・ 言葉で伝えることの難しさを知り、積極的にコミュニケーションを取ることの大切さを知る。

(2) 概要

- 1) 「指の運動」を通して、緊張をほぐすと同時に、脳の活性化を図った。
- 2) 事前学習時に課題として伝えていた学校新聞を使って各学校1分間ずつ学校紹介を行った。
- 3) 全体ワークとして、決められた時間（1分間）内にできるだけ多くの人と自己紹介と握手をして交流を深める「握手でこんにちは」を行った。
- 4) グループワークとして、SDGs アイコンの絵合わせで仲間を見つける「仲間をさがせ！」でグループづくりをした後、グループ内で改めて自己紹介をした。「かいてみよう！」では、ファシリテーターの指示したもの（月や流れ星など）を一枚の紙に「かき」、出来上がったもの比べることで、ひとそれぞれ言葉のとらえ方が異なることに気付いた。
- 5) グループづくりで各グループに与えられたSGDsのアイコンに関わる身近（九州や日本）の課題を考えてもらい、次のワークショップにつなげた。

(3) 参加者からの声

【高校生】

- ・ 自分の学校について発表できた。また、他の学校のプレゼンを見てすごいなと思った。もっと知りたいと思った。
- ・ 握手をするのが新鮮でした。緊張がすぐにとけたので、その後の活動が楽しかったです。
- ・ 言葉の受けとり方が人によって様々なのだということがわかった。

【教員】

- ・ それぞれの学校の特徴が興味深かった。いつのまにか打ち解けるように工夫がなされていた。
- ・ 学校新聞は事前に四人で考え、何とか完成することができた。その中でチームワークができたように思う。全体的にこの時間はもう少し多くとっても良かったと思う。
- ・ 一分というハードルは高かったが、一分だからこそ笑いなども生まれてよかった。

(4) 所感

学校紹介では、各学校の魅力が伝わる学校新聞が作成されており、他校生徒の興味を引くことができていた。「一分間」という時間制限は事前学習の際に予め伝えてあったものの、時間内に発表を終えられない学校もあった。次回からは、時間制限について認識を共有しておく必要があるかもしれない。

短い時間内に6種類のワークを実施したため少し駆け足ではあったが、それぞれのアクティビティーを通して、参加者同士の交流を深め、緊張を解くだけでなく、言葉で伝えることの難しさや、積極的にコミュニケーションを取ることの大切さを知るという当該セッションの「ねらい」を楽しみながら達成できたと感じた。



(学校新聞を用いた学校紹介)



(握手でこんにちは)

【プログラム名】

国際理解ワークショップ

担当：茂田 敬介（長崎県国際協力推進員）

赤星 亜朱香（熊本県国際協力推進員）

(1) ねらい

- ・ SDGsに含まれている貧困系、環境系、人権系、経済系、などの要素を理解する。
- ・ 先進国、途上国におけるSDGsを考えることにより、それぞれの国に課題があることを理解する。
- ・ 自分ができる身近なアクションを定めることにより、SDGsを自分ごとに落とし込み、今後の活動に繋げる。

(2) 概要

- 1) 「SDGs アイコンのグループ分け」…SDGsの17のゴールのアイコンの中で似ているものや共通点があるものを集めグループに分け、ペンで丸に囲み名前をつけた。
- 2) 「SDGsを考えるワーク」…開発途上国であると同時にSDGs先進国であるインドネシアにおいて力を入れて取り組むべきSDGsのゴールのトップ3と、最も優先順位の低いゴール（達成済み、達成に近いゴール）1つを班で話し合い、その後同じく九州におけるゴールについて話し合った。その上で、インドネシアと九州のランキングを並べて比較し、班毎に発表を行った。
- 3) 「My SDGs 宣言！」…SDGsの17の目標から1つを選び、その目標について今日から自分がやっていけそうな身近なアクションを考え、生徒一人一人が宣言を行った。

(3) 参加者からの声

【高校生】

- ・ グループ内での意見を共有することで、自分と違う意見を聞き、より深く考えることができました。日本（九州）での課題を話す時にも、他県の話を知ることができ、興味がわきました。
- ・ それぞれの地域のことを知っているのでも、色々な意見を聞くことができ、勉強になった。もうちょっと予習してきていれば、もっと理解することができたのと思った。
- ・ SDGsについて改めて深く考えることができた。国によって解決すべき目標が異なったり、共通していたりしていた。「My SDGs」を決めたので、それを達成できるよう努力したい。

【教員】

- ・ SDGsカードの使い方のヒントをもらえた。九州のSDGsについて考えることで身近に感じた。生徒達の17の目標の分け方がクリアで参考になった。
- ・ SDGsについて本校でも取り扱っているため、今回のように自分自身も体験する活動

ができ、また生徒の考えも聞くことのできる機会は、とても参考になりました。

- ・ 先進国と途上国とでは様々違うことがありますが、SDGsの観点で見ると、同じ番号の課題が生じることに驚いた。

(4) 所感

今年度よりワークショップのテーマとしてSDGsを導入した。昨今SDGsの認知度も徐々に上がってきており、参加校の中にはSDGsを取り扱っている学校もあった。今後SDGsに対する機運はより高まってくることが予想されるため、次年度もSDGsを絡めた内容とすることで、より多くの参加者にSDGsを自分ごとに落とし込んでいってもらえるのではないかと考えている。



(SDGs アイコンのグループ分け)



(インドネシア・日本のSDGsについて発表)

【プログラム名】

青年海外協力隊活動計画作り

担当：外西 朋子（鹿児島県国際協力推進員）

田代 芽衣（宮崎県国際協力推進員）

(1) ねらい

青年海外協力隊員になりきり、村をより良くするため村人を巻き込んだ活動計画を立て、現地の人々にとって本当に必要な支援とは何かを考える。

(2) 概要

<設定>

架空のウェストティモール国バリボ村の村役場へコミュニティ開発隊員として派遣された設定で2年間の活動計画を作成した。活動内容の要請は「現地の伝統や文化を尊重しながら共により良い村づくりに協力すること」であるが、まずは派遣された村の現状や関係者を調査し地域の良い点・課題点を見出した。それらをもとに活動計画を作成する上での考慮事項として「実現可能性」「妥当性」「持続性」「独自性」を挙げ、4つの観点で計画発表の評価となることを伝えた。

<形態>

グループ活動（生徒：4～5名×6グループ、教員：7名×1グループ）

<内容>

1) 導入

- ・ プログラムの全体説明

「青年海外協力隊とは」「職種の紹介」「活動計画について」「発表ルール」「評価項目」

2) 村の概要把握

- ・ 地図上で村の位置を確認する
- ・ 写真から読み取れる村の様子をもとに気付いたことを書き出す
- ・ グループ内と全体で共有する

3) コミュニティ開発隊員の活動事例紹介

- ・ 体験談発表：長崎県国際協力推進員 茂田敬介（派遣国：ザンビア）

4) 村の状況分析

- ・ 村の概要シートを読み込む
- ・ 得た情報から良い点・課題点をポストイットへ書き出す
- ・ ポストイットをポスターに張り出しながらグループ内で共有する
- ・ 他のグループを見て回る

5) 課題点の解決に向けた取り組みの優先順位づけ

- ・ ダイヤモンドランキングを用いてグループ内で解決事項を順位化

- ・ 課題点の解決策を出し合いポストイットへ書き出す
- ・ 良い点を更に良くするためのアイデアをポストイットへ書き出す
- ・ 意見をグループ内で共有する

6) 活動計画作成

<設定>の考慮事項を念頭に置き「活動計画名」「対象者」「協力者」「村の現状」「活動内容」「目指す村の将来のイメージ」を取り入れた計画作り

7) JICA 事務所（企画調査員）の配置

青年海外協力隊の良き相談相手となり個々のボランティア業務を支援する企画調査員役を配置した。実際に経験のある JICA 九州の職員 1 名（東）と協力隊経験者 3 名の協力を得て計画作成中の質疑に対応した。

(3) 参加者からの声

【高校生】

- ・ かなり充実していた。学校ではあまりグループ活動をしないが今回 4 人でたくさん話し合い、村の人々とどのように活動し協力するかの計画を立て、持続できる方法を言葉にしていくことがとても楽しかった。
- ・ 活動する地域の課題を見つけるだけでなく、それは2年間で解決できるのか、自分たちが日本に戻っても現地の人だけで継続できるか、本当に現地の人が必要としているのかなど多くのことを考えながら計画していくことが難しかったがとても楽しかった。

【教員】

- ・ 想像力の貧しい子供たちがバリボ村を知る・理解する・寄り添うために、もう少しイメージできる導入があると良かった。
- ・ step by step で計画作りが出来るように工夫されていて今後の授業で応用したい。
- ・ 教員のグループでもいろいろ意見が分かれ、話しながら一つの課題を見つけていくことはなかなか難しくもあったが充実していた。

(4) 所感

限られた時間の中で参加者が活動に注力できるように、例年に比べ作業を簡潔化しかつ分かりやすく説明するように努めた。また参加者は、本当に現地の人々にとって必要な支援とは何か、時間をかけて意見を出し合い、様々な視点を持った計画づくりができていた。



(村の良い点・課題点の分析)



(企画調査員への相談)

【プログラム名】

国際交流パーティー

～研修員の国・文化を知り、世界の料理を味わおう～

担当：和田 仁智（佐賀県国際協力推進員）

井本 望（大分県国際協力推進員）

(1) ねらい

- ・ JICA 研修員との交流を通して異文化への理解を深める。
- ・ 十分に言葉が通じない相手とのコミュニケーションを体験し、コミュニケーション能力を高める。
- ・ 相手を理解しようとすることの大切さや意義に気づき、日常生活へも通じることに気付く。
- ・ 世界各国の食卓事情や料理を味わうことで、食文化の違いを理解する。
- ・ 日本食を紹介することにより自国の食文化を振り返る。

(2) 概要

JICA 研修員 1～2 名が高校生の各グループに入り、自己紹介や研修員の国の食事情調査及び発表を行った後、交流食事会を行った。

【参加研修員】

- ・ 先進国市場を対象にした輸出振興 / マーケティング戦略 (C) 7 名
(アフガニスタン、エジプト、シリア、チュニジア、モロッコ、ヨルダン)
- ・ 廃棄物管理技術 (応用、技術編) 5 名
(エチオピア、コンボ共和国、スリランカ、パレスチナ)

【流れ】

- 1) プログラムの趣旨を説明
- 2) 研修事業、JICA 研修員について動画を通して概要紹介 (YouTube『研修員受入事業 60 年 - 日本の経験・知見を伝える - ダイジェスト版』)
- 3) 全体での JICA 研修員紹介
- 4) グループに分かれて各自の自己紹介
高校生：名前、出身県、年齢 (学年) 研修員：名前、出身国、職業
- 5) 研修員の国の食事情調査 テーマ：よく食べている料理
該当する料理について、材料や作り方、食べ方等に関して JICA 研修員にインタビューする。聞き取った内容を高校生が模造紙にまとめ、全体に発表した。
(研修員 1 名につき各班 1 分間で、可能であれば英語での発表を促したところ、全グループが英語で発表した。)
- 6) 交流食事会：バイキング形式で食事を取り、各班で会食した。

7) 食事終了後、各研修員に交流パーティーに関する感想を発表してもらった。

(3) 参加者からの声

【高校生】

- ・自分が言いたいことがあってもそれを英語で相手に伝えることは難しいのだなと感じた。今回は身振り手振りを使いながら、私がいまだに知らなかった国やその国の料理について知ることができ、良い経験になった。
- ・英語を使って話すことは緊張しますが、話してみると、相手の国の知らないことをたくさん聞くことができ、とても楽しかったです。もっともっと、自分の英語の技術を上げたいと思いました。
- ・私は外国人と交流する機会が学校のALTの先生くらいだから最初はすごく緊張した。私は英語が得意な方ではないが、知っている単語や習った文法を思い出しながら少しだけ話すことができた。
- ・最初不安だったけど、後から慣れてきてすごく楽しく感じた時間だった。他国の人達とお互いの文化や伝統について知ることは大切だし、楽しいことだなと思った。

【教員】

- ・英語をはじめとする言語が、「伝える」ためのひとつの手段であることを頭で理解するより体感できたことがすごくよかったです。研修員の皆様のご協力に感謝しています。
- ・生徒にとっては、一番思い出になるイベントだったと思います。複数の研修員と話せるゲーム等があると良いと思いました。英語を使いながら研修員の国の言語について学べるようにできたらいいなと思いました。

(4) 所 感

JICA 研修員との交流において、高校生たちは、英語やジェスチャーを使って試行錯誤しながらコミュニケーションをとることで、異文化や他言語に対する関心を高め、異文化への理解を深めているようだった。十分に言葉が通じない相手とのコミュニケーションを体験し、コミュニケーション能力の重要性や相手を理解しようとする大切さや意義を実感しているようだった。

世界各国の食卓事情について知り、料理を味わい、また、日本の文化や日本食の紹介をすることで、「食」という視点から日本の文化との比較や振り返りを行うきっかけとなったようだった。

事前学習で交流パーティーの事前準備（英語で話をするなど）を徹底することは改めて重要だと感じた。上手くいくことやどんなに準備しても足りない部分があり、その経験が異文化理解への更なる関心や意欲につながるという意味で、高校生は程よい達成感と挫折を感じているようだった。



(JICA 研修員の国の食事情調査)



(JICA 研修員の国を地図で確認する)



(英語で全体発表する)



(JICA 研修員との交流食事会)

【プログラム名】

青年海外協力隊活動計画発表

担当：田代 芽衣（宮崎県国際協力推進員）

外西 朋子（鹿児島県国際協力推進員）

(1) ねらい

- ・ プログラム「青年海外協力隊活動計画作り」で各グループにて作成した青年海外協力隊としての「活動計画」を発表する。
- ・ 大勢の人の前で発表する経験を通じて、自分の考えを伝えること、人の話を聞くことの大切さに気付く。
- ・ 他のグループの発表で異なる意見を聞くことや質疑応答により、新たな視点を知り、国際協力に対する理解を深める。

(2) 概要

活動計画の発表後、生徒6グループの発表に対し評価・投票を行い、その中の上位2グループを表彰する。（最優秀賞・優秀賞）教員グループも発表するが、評価・投票は対象外とする。

【流れ】

発表前の活動として「マーダ ZUMBA ストレッチ」を行い、体を動かすことで緊張を解いた。生徒も積極的にストレッチに参加していた。

1) ルールの確認と評価シートの説明

1グループ6分以内で全員が発表し、3分間の質疑応答の時間を設けることを説明した。発表は村人を対象に行い、質問は村人の立場からでも青年海外協力隊の立場でも良いこと、また計画内容を作成した背景や理由についても触れることを確認した。

投票は、評価シート（評価項目は実現可能性・妥当性・持続性・独自性の4つを5段階で採点）を参考に行うこととした。

2) 活動計画発表

120分の計画づくり仕上げの作業後、30分間の発表練習を実施。7グループ（教員1グループ・生徒6グループ）が順番に発表を行った。

作成した計画内容は、保健衛生、環境教育、栄養改善など様々であり、計画した活動を現地住民に協力してもらえようと呼びかけをし、各グループの個性が生かされた発表形式があり、工夫が凝らされていた。

評価の面で JICA 九州の職員にも協力してもらい、実際に想定した質問やコメントがあった。また、後半になるにつれ生徒間で活発な質疑応答が交わされた。

3) 投票

生徒、引率教員、JICA 九州職員、国際協力推進員が行い、獲得票数が多い順に1位・2位のグループを決定し、表彰した。

4) 講評

JICA 九州市民参加協力課 江頭課長より講評を行い、実際の国際協力の現場での事例も紹介しながら良かった点や改善点に言及した。

5) まとめ

各校混合でのグループ活動がこの時間で最後になることから、これまでの活動を通じた気付きや学び、感想などをグループ内で共有して、締めくくりとした。

(3) 参加者からの声

【高校生】

- ・ 自分たちで必死に考え、発表の練習をした計画をみんなに発表をすることができてとても嬉しかったし、やりがいを感じる事ができた。
- ・ （発表対象者である）村の人たちにどのように協力し、どうしたら役立てるかを考えることができて良かった。質問に答えることで、改善点を見つけることもでき「考えること」「伝えること」の大切さを学べた。
- ・ 活動計画発表は質問されることを予想することも大切だと思った。なかなか話し合いが進まず思い通りの発表ができなかったが、皆で意見を出し合い仲が深まった。
- ・ 2日間かけて準備したものを思い通りに発表することができたので達成感も大きく、内容の濃い時間を過ごすことができた。ここで得たものを自分が吸収するだけにとどめず、自分の周りの人に伝えようと思う。

【教員】

- ・ 2日目に計画を作成する時間があった為、一昨年よりも時間に余裕があったように思う。
- ・ 生徒たちの発表は堂々としていて、バリボ村への愛を感じた。村人役（JICA 職員）の方々の質問も視点が鋭く、勉強になった。
- ・ 生徒たちの柔軟な発想に驚くとともに、2日間でプランを立てられる力を引き出して頂いた JICA の皆さまに感謝します。

(4) 所感

プログラム「青年海外協力隊活動計画作り」で各グループが作成した「活動計画」を参加者全員が発言し、発表に参加することができていた。質疑応答の時間帯にて発言が特定の人物に偏る場面がみられた為、次回からはより多くの生徒が積極的に質疑応答の分野に参加し、発言できるような働きかけや工夫が必要となってくるのではないかと感じた。

しかしながら、生徒は多くの人の中で発表する経験を通じて、自分の考えを伝えること、人の話を聞くことの実践ができており、ねらいは概ね達成できたと評価できる。



(マーダール ZUMBA ストレッチの様子)



(活動計画発表の様子)

【プログラム名】 振り返り・閉会式

担当：森川 大毅（福岡県国際協力推進員）

和田 仁智（佐賀県国際協力推進員）

(1) ねらい

- ・ 2日間のプログラムを振り返ることで学びを整理する。
- ・ 参加生徒が学校で取り組みたい目標を立て、今後の学校としての取り組みへの橋渡しをする。

(2) 概要

<振り返り>

学校毎にグループとなり、2日間のプログラムの振り返りを行った。事前学習で作成した「国際協力」をテーマとしたウェビングに追加して書いてもらい、その後、プログラムの感想や学びを共有した。

次に2日間の学びを学内で活かす取り組みについて話し合い、最後は各学校の取り組みを各県国際協力推進員へ向けて発表した。

<閉会式>

2日間のプログラム終了にあたり、JICA九州センター市民参加協力課課長の江頭が閉会の挨拶を行った。プログラムを振り返り、学んだことを今後活かしてほしいと生徒に伝え、閉会の言葉とした。その後アンケートを回収し、解散とした。

(3) 参加者からの声

【高校生】

- ・ 以前より、国際協力の認識が広がってとても良かった。
- ・ 違う視点で考える大切さを知った。

【教員】

- ・ 生徒が時間を費やした活動に関して、しっかりと評価をしてくださる時間が設けられており、生徒は達成感と自己肯定感をしっかり得られたのではないかと思います。

(4) 所感

ウェビングに多くのキーワードを追記できたことにより、最後に生徒自身の認識の広がりを視覚的に感じる事ができ良かった。各県推進員との振り返りの時間を設けたことにより、今後の各県・各学校で取り組む内容が共有できたことが良かった。2日間のプログラムを振り返り、次への行動へと繋げることができたことにより、ねらいは概ね達成できたと感じる。本プログラムを契機として、今後推進員が各県で学校との繋がりを継続していくことが大切であると感じる。



(ウェブングに追加記入)



(閉会式の様子)

2019年度 高校生国際協力実体験プログラム 参加校一覧

< 7月25日(木) ~ 7月26日(金) 生徒26名、教員7名 計33名 >

	県	立	高等学校名	生徒	1年	2年	3年	男	女	教員
1	福岡	私立	明治学園	3		3			3	1
2	佐賀	県立	唐津西	4			4		4	1
3	長崎	県立	鳴滝	4	1	1	2	4		1
4	熊本	県立	高森	4		4		2	2	1
5	宮崎	私立	宮崎学園	4		4			4	1
6	鹿児島	私立	鹿児島純心女子	3	3				3	1
7	鹿児島	私立	鳳凰	4	4			2	2	1
小 計 (人)				26	8	12	6	8	18	7

プログラム実施スタッフ一覧

	所属	名前	任国	職種
1	福岡県国際協力推進員	森川 大毅	大洋州・バヌアツ	小学校教育
2	佐賀県国際協力推進員	和田 仁智	東アフリカ・ケニア	青少年活動
3	長崎県国際協力推進員	茂田 敬介	東アフリカ・ザンビア	コミュニティ開発
4	熊本県国際協力推進員	赤星 亜朱香	東南アジア・東ティモール	栄養士
5	大分県国際協力推進員	井本 望	中南米・セントルシア	青少年活動
6	宮崎県国際協力推進員	田代 芽衣	東南アジア・ラオス	看護師
7	鹿児島県国際協力推進員	外西 朋子	東南アジア・ネパール	野菜栽培
8	(特活)九州海外協力協会	米村 淳平	大洋州・ミクロネシア	小学校教育

3. 添付資料

高校生国際協力実体験プログラム募集要項

INTERNATIONAL COOPERATION

JICA九州

2019

高校生国際協力
実体験プログラム

・参加費無料・

Yeah!

開催日: 2019.7月25日(木)・26日(金)

SUMMER VACATION
& DISCOVERY

応募締切
5月20日(月)

主催: 独立行政法人 国際協力機構 九州センター
 後援: 福岡県教育委員会 佐賀県教育委員会 長崎県教育委員会 熊本県教育委員会
 大分県教育委員会 宮崎県教育委員会 鹿児島県教育委員会
 福岡市教育委員会 北九州市教育委員会 熊本市教育委員会(予定)

独立行政法人 国際協力機構 JICA

世界・仲間・自分、発見!

事前に知っておこう!



JICA(ジャイカ)とは?

JICA(国際協力機構)は、日本政府の開発途上国へのODA(政府開発援助)を行う組織です。

青年海外協力隊って?

JICAが実施する海外ボランティア派遣制度です。開発途上国で現地の人たちと生活を共にし、貧困や環境など、その国の抱える課題に取り組みます。

JICA九州とは?

JICAの九州における国際協力の拠点です。開発途上国から日本の技術を学びに来た人たちのための研修施設もあります。

Start

事前学習

●各校にて実施します

「国際協力」って
なんだろう?

「実体験プログラム」への参加前に、各地の国際協力推進員と一緒に国際協力について考えてみよう。



Program

・アイスブレイク・



・ワークショップ・



・計画作り・



九州各地の高校生たちと世界を感じる2日間!

「JICA九州 高校生国際協力実体験プログラム」は九州各県から集まった仲間が1泊2日を共にし、世界と自分とのつながりを体感する、高校生のための国際協力入門講座です。



多様な文化に触れる

九州各地から集まった仲間たちと親睦を深め、日本に研修に来ている開発途上国の人たちとの交流や世界の料理を楽しもう!

青年海外協力隊になる

青年海外協力隊になりきって、自分に何ができるか考えて発表してみよう。現地の人たちに本当に必要とされる支援って何だろう?

Goal

事後学習

●各校にて実施します

自分の変化を伝えよう!

「実体験プログラム」で感じたこと、考えたことを表現し、周りの人に伝えよう。

・計画発表・



Time Table

1-Day

10:00~ 開会式(10分)
10:10~ アイスブレイク、自己紹介(40分)
10:50~ 移動
11:00~ ワークショップ(90分)
12:30~13:30 昼休み
13:30~ 計画作り(210分)
17:00~18:00 チェックイン
18:00~ 交流パーティー(120分)
20:00 終了

1-Day

Time Table

2-Day

9:30~ 計画作り・グループ内まとめ(150分)
12:00~13:00 昼休み
13:00~ 計画発表(120分)
15:00~ 振り返り(30分)
15:30~ 閉会式・写真撮影(20分)
15:40 終了

2-Day

※プログラムの内容や時間は変更する場合があります。



・交流パーティー・



Support staff

JICAボランティア経験者である各デスクの国際協力推進員たちが、プログラム全体をサポートします。

JICAデスク 福岡

(公財)福岡よかトピア国際交流財団内
TEL092-262-1714
jicadpd-desk-fukuokashi@jica.go.jp

JICAデスク 佐賀

(公財)佐賀県国際交流協会内
TEL0952-25-7921
jicadpd-desk-sagaken@jica.go.jp

JICAデスク 長崎

(公財)長崎県国際交流協会内
TEL095-823-3931
jicadpd-desk-nagasaki@jica.go.jp

JICAデスク 大分

(公財)おおいた国際交流プラザ内
TEL097-533-4021
jicadpd-desk-otaken@jica.go.jp

JICAデスク 熊本

(一財)熊本市国際交流会館内
TEL096-359-2130
jicadpd-desk-kumamotoshi@jica.go.jp

JICAデスク 宮崎

(公財)宮崎県国際交流協会内
TEL0985-32-8457
jicadpd-desk-miyazakiken@jica.go.jp

JICAデスク 鹿児島

(公財)鹿児島県国際交流協会内
TEL099-221-6624
jicadpd-desk-kagoshimaken@jica.go.jp



JICA九州 高校生国際協力実体験プログラム



SUMMER VACATION & DISCOVERY

JICA 九州高校生国際協力実体験プログラム参加申込書

参加日程	7/25~7/26		
ふりがな			
高等学校名	立	高等学校	
学校住所	〒		
	TEL		FAX

引率教師	ふりがな		担当教科		性別	男女
	氏名					
	現住所	〒				
生徒1	ふりがな氏名		TEL		学年	年生 性別 男/女
	現住所	〒				
生徒2	ふりがな氏名		TEL		学年	年生 性別 男/女
	現住所	〒				
生徒3	ふりがな氏名		TEL		学年	年生 性別 男/女
	現住所	〒				
生徒4	ふりがな氏名		TEL		学年	年生 性別 男/女
	現住所	〒				

学校所在地からJICA九州までの交通経路	(バスを使用される場合は、運賃と会社名をご記入ください) 学校最寄()線()駅、または()バス会社 ()バス停→ →JICA九州
----------------------	---

※公共交通機関をご利用ください

上記の者が、JICA九州の「高校生国際協力実体験プログラム」に参加することを承認します。

高等学校名		日時	2019年 月 日
学校長			印

【個人情報の取り扱いについて】
参加のお申し込みについて入手した個人情報は、本プログラム実施に係る業務のみに使用いたします。また、当該情報は当機構にて厳重に管理し、正当な理由なく第三者への開示、譲渡及び貸与することはありません。

送付先: 〒812-0025 福岡市博多区店屋町4-8 蝶和ビル503
(特活)九州海外協力協会

2019 高校生国際協力実体験プログラム

グローバルな人材を育てる参加型の「学び」

- 【国際理解】世界の状況や国際協力の現状に気づき理解を深める。
- 【交流】他校からの参加者や青年海外協力隊経験者、外国人との交流を通じ、様々な価値観に触れる。
- 【道路・生き方】自分を見つめ直し、世界の中でどう生きるのか考えることで、将来の道路選択に役立てる。

日程

7月25日(木)・26日(金) ※開催は1回のみ

プログラムの流れ

- 事前学習** 6~7月に国際協力推進員が各校を訪問し事前学習を実施します。日程など詳細については、各地の国際協力推進員にご相談ください。
- 本プログラム** 2日間の全日程にご参加ください。
- 事後学習** 例年の参加校はプログラム終了後、学校行事や各地の国際交流・国際協力イベントなどで、本プログラムの成果を発表しています。また、参加した経験を活かした「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」への応募も推奨しています。詳細は各地の国際協力推進員にご相談ください。

会場

独立行政法人 国際協力機構 九州センター(JICA九州)
福岡県北九州市八幡東区平野2-2-1 (JR鹿児島本線八幡駅下車徒歩12分)
TEL093-671-6311(代表) www.jica.go.jp/kyushu

参加条件

- 国際理解教育・持続可能な開発のための教育(ESD)・キャリア教育に積極的に取り組んでいる学校、又は今後取り組む意欲がある学校。
- 学校長より参加の許可が得られること。
- 生徒の保護者から参加への同意が得られること。
- 生徒が過去に本プログラムに参加していないこと。
- 教員・生徒とも、事前・事後学習を含み、全プログラムに参加可能なこと。選考後の参加者交代は不可。

募集数

- 九州7県から最大7校
- ※1校につき、生徒3~4名(+教員1名)での参加を基本とします。参加希望校が定数を超過した場合は、応募書類、県のバランス、新規希望校の優先等を考慮して選考します。
- 最少開催人数:20名

留意事項

- 昼食および夕食代は各自でご負担ください。なお、1日目の「国際交流パーティ」会費として、おひとり1,000円を徴収します。
- 学校所在地からJICA九州までの往復交通費、宿泊費はJICA九州が負担します。
- お車での来場はできません。公共交通機関をご利用ください。
- プログラムへの参加にあたり、JICA九州負担にて参加者全員、国内旅行傷害保険にご加入いただきます。万一事故が生じた場合、保険の給付範囲内で補償いたします。
- 宿泊はJICA九州宿泊棟となります。
- 動きやすい衣服での参加をお願いします。
- 個人都合(部活等)によるキャンセルはご遠慮ください。
- 筆記用具、健康保険証の写し、および緊急時の連絡先をご持参ください。

応募方法 参加申込書をJICA九州ホームページよりダウンロードし、必要事項をご記入の上、以下の送付先まで郵送ください。
[<https://www.jica.go.jp/kyushu/enterprise/kaiatsu/jittaiken/index.html>]

送付先 〒812-0025 福岡県福岡市博多区店屋町4-8 蝶和ビル503 (特活)九州海外協力協会

応募締切 2019年5月20日(月) [必着] ▶ 6月12日(金)迄に結果通知

昨年度参加校実績
福岡県 久留米信愛高等学校, 自由ヶ丘高等学校
長崎県 南山高等学校
熊本県 九州学院高等学校, 宇土高等学校, 天草高等学校
鹿児島県 鹿屋高等学校

参加申込書

独立行政法人 国際協力機構

九州センター 所長 殿

独立行政法人国際協力機構 九州センター主催「高校生国際協力実体験プログラム」の募集要項の内容について承諾し、同プログラムに参加を申し込みます。

併せて、引率に当たっては、①九州センター在館期間を通して消灯・点呼を初め生徒の生活指導に当たること、②生徒のプログラムや JICA 関係者との意見交換にも積極的に参加すること、③申し込み後の引率者変更をしないことについて承諾します。

なお、旅費については下記の口座^(※)にお振込願います。

※口座は学校の公金口座または引率教師の個人口座のどちらでも構いません。

年 月 日

氏 名： _____

生年月日： _____ 年 月 日 年齢： _____ 歳

振込口座

銀行名		支店名	
口座番号	普通・当座		
ふりがな			
名義人			

* 次の質問にお答えください。スペースが足りない場合は別紙に記載してください。

(1) 本プログラムへの参加動機を教えてください。

(2) これまでの国際理解教育／開発教育に関する取り組み実績(教師・生徒単位または学校全体)での取り組みがあれば記載してください。

(3) JICA では開発教育支援事業として出前講座、教師海外研修、エッセイコンテスト他のプログラムをご案内していますが、これまでご自身の学校で JICA の開発教育支援事業を活用されたことがあれば活用事例をご紹介いただくと共に、今後の活用計画を教えてください。

(4) プログラムに参加された後、どのような取り組みを検討されているか記載してください。

2019年度 高校生国際協力実体験プログラム アンケート (26名)

1日目 (生徒用)

[自己紹介・アイスブレイク]

満足度

	(人)
満足	20
やや満足	6
やや不満	0
不満	0

感想や学んだこと、気付いたことなど自由記述

- ・ 握手をすることが新鮮でした。緊張がすぐに解けたので、その後の活動が楽しかったです。
- ・ 最初はとても緊張していたけれど、握手したり学校紹介を聞いたりしていくことで、距離が縮まっていったと思います。
- ・ 初めは、班のみんなが緊張していました。でも、たくさん意見を交換する中で冗談を言い合えるまで、気軽に話せるようになりました。
- ・ 学校新聞の紹介では1分間の中で各学校の特徴を知ることが出来、指の体操など難しかったけど緊張もほぐれてよかったです。握手しながら相手の顔を見て話すのはとても良いと思いました。

[国際理解ワークショップ]

満足度

	(人)
満足	19
やや満足	7
やや不満	0
不満	0

感想や学んだこと、気付いたことなど自由記述

- ・ 話し合いをする時、静かになることが多く、満足に会話ができませんでした。ですが、自分の思っている事や考えている事を伝えることが出来たので良かったです。
- ・ 私の学校でもSDGsについてディスカッションをしたりすることが良くあるが、他県ならではの考え方も聞けて、新しい情報や意見が得られた。今まで私は全てを知っているつもりで話していたが、自分の視野が狭かったということに気付けた。
- ・ SDGsは学校でも取り組んでいたが、身近な問題とは感じられていなかった。国際理解ワークショップを通してインドネシアと九州を比較して自分達で考える事で身近な問題だと認識することが出来た。

- ・ 自分達で気付くことが難しかった。比較対象があるとわかりやすくなった。命を守るにはやはり“水”が大切だけど、水をどうにかするには教育も必要で…と全ての課題に対して、全ての取り組みが必要なのでは…？と感じました。ただその核となるのは“パートナーシップ(=協力)”でした。理解し、協力できる人材の育成が大切だと思いました。

[青年海外協力隊活動計画作り]

満足度

	(人)
満足	20
やや満足	5
やや不満	1
不満	0

感想や学んだこと、気付いたことなど自由記述

- ・ 村の問題を解決するためには様々な障害があり、とても難しかったが、グループのみんなで意見を出し合い、計画を作ることができた。だが、海外協力を行うことの困難さも感じた。
- ・ 改善が必要な点、必要ない点、2年間でできるか、難しいかなど様々なことを考えながら計画して行く事がわかった。写真や紙に書かれた情報だけでも多くの改善点を見つけられた。
- ・ 読み込んでから意見を出し、どれが一番解決すべきか考える時間が短くて大変だったけど、班で協力して行うことが出来たからよかった。もっと時間を有効的に使って、様々な事を考えたかった。
- ・ 5人で話し合ってたはずなのですが、男女で分かれてしまい、女子でほとんど意見を出してまとめて…という活動をしてしまいました。“一緒に考える”事を私は大切にしたいです。座る席を男女男女みたいにすればよかったなと思いました。計画は最初の目的とは変わってしまいましたが、いい具合に進んでいると思います。

[国際交流パーティー]

満足度

	(人)
満足	18
やや満足	7
やや不満	1
不満	0

感想や学んだこと、気付いたことなど自由記述

- ・ 最初は英語が上手く伝わるか心配だったが、お互いに理解しながらしゃべれたのでとても嬉しかった。また、アラビア語も教えて頂き、とても貴重な体験をすること

ができた。

- ・ 外国の方と英語で話をしたり、質問をしたりするのはとても難しかったですが、一緒に写真を取ったり、ごはんを食べたりして楽しかったです。今の英語の力だけではダメだと分かったのでこれからもっと勉強します！
- ・ たくさん話したい事がありましたが、英語に出来なかったのでやや満足です。もっと英語を勉強したいと思いました。発表の時、班の人にマイクを渡せばよかったと後悔しています。
- ・ もっと英語を話せたら…という気持ちが大きかったです。グループ内のほかのメンバーの子も他のグループの子もたくさん研修員の方とコミュニケーションを取っていてすごいなと思いました。研修員さんたちもわかりやすく伝えようとして下さっていて優しかったです。いい出会いでした。もっと話したかです。自分にやや不満でした。

今日の感想や新しく知ったこと・もっと知りたかったこと・明日のプログラムに期待することなど、1日目を振り返って自由に書いて下さい。

- ・ 昨日の国際交流パーティーでは、その国のことをもっとよく知りたいと思いました。また、明日のプログラムではさらに理解を深め、自分に出来ることは何かをしっかりと考えられたらいいです。
- ・ このような交流会に参加することが出来て2度とめぐり会えない友達が出来ました。このような出会いを大切にしたいです。
- ・ 自分の考えや意見を伝える事等コミュニケーションの難しさを痛感した。
- ・ 来る前に積極的に会話をしようとか国際交流パーティーではたくさん質問をしようと考えていましたが、実際には緊張で言葉が出ないことで思っていたように出来なくて悔しかったです。ですが、他の人の意見や考えをたくさん聞いて知ることが出来たので充実したと思います。

2日目（生徒用）

【青年海外協力隊活動計画発表】

満足度

(人)

満 足	17
やや満足	9
やや不満	0
不 満	0

感想や学んだこと、気付いたことなど自由記述

- ・ 質問に対しての答えを用意していなかったので上手く答えることが出来ませんでした。

た。また、詳しいところまでカバーできていなかったなので、このアイデアをもっと良くすることができたらいいなと思いました。

- ・ 中々話し合いが進まず思うような発表が出来なかった。だけど、みんなで話し合っ
て意見交換をし、仲も深まったので良かった。すごくいい経験をする事が出来た。
- ・ 発表することで村の人たちにどうしたら協力し、村の貢献にどうしたら役立てるか考える事が出来てよかった。質問に答えることで改善点も見つけることが出来、考えること、伝えることの大切さを学べた。
- ・ この2日間で同じチームの人と準備してきたものを思い通りに発表することが出来たので、達成感もすごく大きく、内容の濃い時間をすごすことが出来た。ここで得た物を自分が吸収するだけでとどまらずに自分の周りの人に伝えることをしたいと思う。

【振り返り】

満足度

(人)

満 足	20
やや満足	4
やや不満	0
不 満	0
未回答	2

感想や学んだこと、気付いたことなど自由記述

- ・ 実体験プログラムの事前学習としてウェビングをしたときは時間が余ってしまうほど思い浮かばなかったが、プログラム後の今は時間が足りなくらい「国際協力」に関して思うことがたくさんあり、ここで得られたたくさんのことを身の回りに伝えるなどをして行動に移したい。
- ・ 国際理解について、あまり知らなかった私が積極的にSDGsのゴールを元にどんな事が世界で起こっているのかを考えるようになったので、自分を変えることが出来てよかったです。
- ・ 今回はJICA 推進員の方々、海外の方々、同じ高校生たちなど人との出会いがたくさん生まれました。この人脈はこの2日間で終わりではなく、一生続くと思います。いつかまた今回であった方々と出会うことが出来るように日々過ごしていきたいと思います。
- ・ 最初の事前学習よりも書きたいことがたくさん出てきた。国際協力がより身近に感じられたなと思った。

□ 2日間を通して、このプログラム全体の満足度は_____パーセント（％）

(人)

100%以上	9
90-99%	13
80-89%	0
79%以下	4

満足度の理由

【100%以上】

- ・ 外国や英語に対して、国際協力に対しての価値観が変わった。また、活動計画を考えていくうちに地元の問題ともリンクしているところが多く考えさせられた。
- ・ 人見知りな私ですが、他校の人たちと積極的に話すことが出来ました。コミュニケーション能力を高めることが出来て色々な人と話すことに慣れました。また、SDGsのことについて深く学ぶことが出来て国際理解についてとても興味を持ちました。そして、これから自分に出来ることは何かを考えて、実際に行動をしようと感じました。このように、今までの自分を変えることが出来たのでこのプログラムに参加してよかったと思いました。

【90-99%】

- ・ プログラムの内容自体はとても濃い内容で、満足できる物でしたが、英語での会話がなかなか続けられなかったのが心残りでした。この体験を通して今まで自分が出来なかったり、してこなかったことを経験できたのでよかったです。
- ・ 誰かに一方的に教えてもう形で“学ぶ”のではなく自分が実際に“体験”するという形で学ぶことが出来、日頃の学習の何倍にも印象に残るものとなったため。また、行動に起こすということの大切さも学ぶことが出来た。

【79%以下】

- ・ 交流が出来、色々な人と意見交換や学校のことについて話せたのは良かったです。また、自分達で考え活動を企画し、発表したのは本当に大変だったけど、本当にいい経験でした。ただ、もっと自分の英語力やコミュニケーション力をつけておけばディナーも充実したものとなったかなと少し後悔しています。
- ・ チーム内での活動が多かった中、少しも意見を言うことが出来なかった。積極的にプログラムに参加することが出来なかったから。

□ 一番印象に残ったプログラムは何ですか。その理由を記入してください。

(人)

国際交流パーティー	17
青年海外協力隊活動計画づくり	7
青年海外協力隊活動計画発表	2

【国際交流パーティー】

- ・ 英語での活動で大変でしたが、各国の研修員の方々の国の特徴や料理などたくさん

知ることが出来、とても楽しい時間を過ごすことが出来ました。各国の料理も食べる事が出来、いい経験が出来ました。

- ・ あの距離で外国の方と話す機会が無かったので、とても嬉しかったです。また、単語だけでも少しは通じることが分かりました。もっと日常会話をしゃべれるようになりたいです。
- ・ たくさんの国の人たちと英語でコミュニケーションすることが出来、今までは間違いを恐れてコミュニケーションをすることが出来なかったんですが、勇気を出して話すことが出来ました。すごく、自分を変えることができた良い機会でした。

【青年海外協力隊活動計画作り】

- ・ 活動する地域の改善点を見つけるだけでなく、それは2年間で改善できるのか、自分達が日本に戻っても現地の人だけで継続できるか、本当に現地の人が必要としているのか等多くの事を考えながら計画していくのが難しかったけどすごく面白かった。みんなでプレゼンの模造紙を作り、色々話し合えてその問題により深く関心を持てた。
- ・ 青年海外協力隊プログラムを作るといってもとても難しく、一つ一つの問題点に優先順位をつけたかったです。色々なアイデアが出たけど、どれも良い案で捨てがたくとても迷いました。しかし、ちゃんとみんな参加して力を合わせて、完成することができました。リハーサルも何回もして、グループの結束力が高まったプログラムでした。

【青年海外協力隊活動計画発表】

- ・ 会って数時間の子たちと計画発表をするというのは難しすぎるのでは？と思っていましたが、グループの子たちはみんな面白くて、英語が出来る子、ネーミングセンスがある、字がきれいな子、知識もたくさん持っている子、それぞれの特徴・得意なことを生かして、1つのものを完成できた達成感が本当に良かったです。
- ・ 自分達で資料を見て、考え・意見を出し合うことが出来たから。また、それをしっかりと話すことが出来たので良かった。さらに2位でとても嬉しかったです。

□ **最後に何か書きたいこと、伝えたいことなどがあれば自由に書いて下さい。**

- ・ まず、今回のプログラムに参加できて本当に良かったです。何度も言っていますが外国の方との交流はとてもいい経験になりました。このプログラムでは自分の体験だけではなく JICA についても前よりも良く分かったと思います。このプログラムに参加したことを日々の生活、受験に向けていかしていきたいと思った。
- ・ 私は今回のようなプログラムに参加したのは初めてだったのですが、プログラム内容がとても濃くて、実際に海外に行ってみるなど以外でも、国際協力について深く考える事が出来るのだと感じた、今回の経験を活かして将来の自分の夢に向けて勉強していきたいと思う。
- ・ JICA や青年海外協力隊に興味があったので、今回このイベントに参加することが出来て本当に嬉しかったです。この経験を活かしてこれからの活動に繋げて行きたいです。

2019年度 高校生国際協力実体験プログラム アンケート (7名)

1日目 (教員用)

1. 各プログラムの感想・意見・改善点などをご自由にご記入ください。

[アイスブレイク・自己紹介]

- ・それぞれの学校の特徴が興味深かった。いつの間にか打ち解けるように工夫がなされていた。
- ・1分というハードルは高かったが、1分だからこそ笑いなども生まれて良かった。
- ・緊張していた生徒も握手の活動をすることで、他の学校の生徒と話す機会が出来た。次の壁新聞を使った自校の紹介では1分終了後には打ち切られるということに多少戸惑っていたが、柔軟に対応できていたようだった。

[国際理解ワークショップ]

- ・SDGsのカードは充実してよいと思うが、いくつか重複した部分があり、それが生徒にとっては深く考えさせることに成りよい取り組みだと思う。
- ・先進国と開発途上国とでは様々違うことがありますが、SDGsの観点で見ると同じ番号の課題が生じることに驚いた。
- ・SDGsの17の項目を分類する活動は難しかった。基準は自分で定めたり答えのない問いに挑んだりすることに自分自身がなれていないせいかもしれない。

[青年海外協力隊活動計画作り]

- ・先生方の柔軟な意見をたくさん聞くことが出来、とても楽しく活動が出来ました。また、生徒達の視点や意見が新鮮で新しい事に気付かされることも多くありました。
- ・想像力の貧しい子ども達がバリボ村を知る、理解する、寄り添う為にもう少しイメージできる導入があると良かった気がします。
- ・隊員の実体験を基にした活動計画を興味深く聞かせて頂いた。ただ「対象者」「協力者」が最後まで良く分からず、実際の計画作りに入ってしまった。隊員のお話がスライドにまとめられていたと思うので、出来れば紙面でのコピーが欲しかった。教員同士で活動しても非常に盛り上がるので、是非学校で生徒にたちに対しても行いたいと思う。

[国際交流パーティー]

- ・以前参加させていただいたときよりも、ワーク(話し合う内容等)や発表など指示があり、話も盛り上がりやすく、内容も深いものになったのではと思います、よい改善をされているなあと思いました。
- ・英語をはじめとする言語が「伝える」ための一つの手段であることを頭で理解するより体感できたことがすごく良かったです。研修員の皆様のご協力に感謝してい

ます。

- ・生徒にとっては一番思い出になるイベントだったと思います。複数の研修員と話せるゲームなどがあると良いと思いました。英語を使いながら研修員の国の言語について学べるように出来たらいいなと思いました。

[その他]

- ・緊張していて自信を無くしていた本校の生徒でしたが、いざ他校の生徒さんや研修員の方と交流している姿を見ると前向きに一生懸命コミュニケーションをとろうとする姿が見られ、彼らの力を改めて知る機会となり嬉しくなりました。
- ・生徒達は「来る前は自分に出来るか不安だったけど、グループのメンバーもみんな優しくであつという間に1日が過ぎてしまった。とても楽しい」という声を口々にして引率した甲斐があったとうれしくなった。充実したプログラム設定に感謝します。
- ・積極的に意見を言い、話し合いをリードしていくタイプの生徒ではないため、グループワークで役割を見つめ果たすことが出来るか正直不安であったが、徐々に打ち解けている様子で安心して活動を見ることが出来た。青年海外協力隊計画作りの中で、グループ内の役割を見出し班員と話し始めたのではないかと思われる。教員としてはあれこれ指示せず見守ることが一番のようだ。

2日目 (教員用)

1. 各プログラムの感想・意見・改善点などをご自由にご記入ください。

[計画発表]

- ・2日目に計画作成する時間があつたため一昨年度よりも時間に余裕があつた。バリボ村をどうするかJICAの方の発表用模造紙も見てみたい。
- ・生徒も無理なく時間をもてあますことなく活動ができていたと思います。自分達も色々アイデアを出し合って話すことが楽しく、意見を出し合うことが大切だと改めて感じました。
- ・段階を経て徐々にプログラムが作れるような工夫がなされていた。プロの方々にアドバイザーとして助言を頂くことで現実味が増した。生徒達も熱心に計画を練っていった夢中になる様子がわかり、段取りのおかげだと感謝しています。
- ・各計画とも村人が本当に必要なもの(こと)なのかという妥当性がうまく説明されているのかなと思いました。最終的なイメージとそれに至るまでの手段に必ずしも関連があるとはいえないものも有りました。

[振り返り]

- ・生徒たちからの質問が少なすぎて残念だった。質問することは攻撃ではなく、理解

を深めることだと知ってほしい。

- ・ 生徒が時間を費やした活動に関して、しっかりと評価して下さる時間が設けられており、生徒は達成感と自己肯定感しっかり得られたのではないかと思います。
- ・ SDGs の計画を作るにあたってあまりにも多くの要素が入り込む為、いかに視点を定め、ポイントを見極める必要が有ると思いましたが。今回の計画には経済的な視点が多かったが先進国の資本主義的な考えを何処まで導入することができるのかなと思いましたが。

2.2 日間を通してこのプログラムの満足度は パーセント

(人)

100%以上	6
90-99%	1
80-89%	0

理由：

- ・ 海外支援、教育に興味のある他県の教員の方々と交流でき、情報共有できたこと。生徒にとっても海外支援について考える貴重な体験となっただろうし、友人も出来たのではないかと。
- ・ 国際理解・協力の初心者の生徒・教員としては、これから様々なことに目を向けるきっかけになりました。生徒の視野も広がっていました。
- ・ 内容の充実度、他校の生徒さん、研修員の方々、JICA の方との交流、発表に対する評価など、どれをとっても生徒(私も含め)にとって学校生活の中ではなかなか得られない物で、心から参加させていただいてよかったと思えました。
- ・ 以前より期間が短くなって研修中は不安もありましたが、企画のおかげで密度の濃い研修になりました。生徒達が満喫していたことが何よりでした。

3. 全体の流れ、時間配分は適切でしたか？

(人)

とても良かった	4
良かった	3
あまり良くなかった	0
良くなかった	0

理由：

【とても良かった】

- ・ 各プログラムについて「時間が長いかな？」と最初は思っても、いざはじめると「あ！」っというまで、特に問題のないものだったと思います。
- ・ 全てのプログラムに余裕があり考える時間も有りよかったです。

【良かった】

- ・ どのアクティビティも無理なく、よい緊張感の中でこなすことが出来たから。

- ・ 時間配分にはかなりの余裕があるように感じた。活動の合間にかかなりの休み時間があり、もてあましていた生徒もいたように感じた。

4. 来年度の高校生国際協力実体験プログラムに向けて、改善点をご記入ください。

- ・ 生徒が自分達の学校に帰った後、実践できるようなゲーム、ワークなどを教えていただけると、帰校後の活動に役立てられると思います。
- ・ 計画発表の段階で JICA 九州に来ている研修生と考える時間があれば活動計画がより現実的になるのに加えて、多様な角度から活動を練ることが出来るように思う。
- ・ 教員レクチャーは全体終了した 20:00 以降のほうがいいのではないかと。英語以外の言語を使った挨拶などを憶えたい。

5. 今後、事後学習として取り組みたいこと、生徒たちと進めていきたいことをご記入ください。

- ・ 全校集会、生徒主体による HR 活動を通して SDGs の啓発に努めていきたい。
- ・ 授業で発表し、クラスの生徒達に還元する。コミュニティ開発で実際に活動された方々の活動内容を調べる。
- ・ 高森にも海外の労働者の方々がいらっしゃいます。その方々との交流や国の現状を知るなど、まずは身近なところから何か始められたらと思います。
- ・ 今回の研修で学んだこと、考えたこと、知ったことを本校の「課題研究」という授業の発表の場で披露したい。

6. JICA の開発教育支援にどのような役割を期待しますか。

- ・ 開発教育の教材貸し出しを利用したいです。
- ・ 協力隊経験者の方のお話や講演など、学校全体の生徒にも知ってほしい事などを話して頂き、海外に目を向けるきっかけを作って行きたいです。
- ・ 海外の事情を良く知らない人、興味はあるがテーマを絞りきれない人など生徒の知識や情報の量に応じて柔軟に指導して頂きたい。また、海外から来た研修生と直に話せる場に同席することで、海外支援に具体的なイメージをもたせることを期待したい。

